川崎市国際交流協会会長賞

海と共に生きる

東小倉小学校　６年生　江頭　結子

私は、物心ついた頃から海や釣りに夢中になっていて、成長するにつれて魚類や水産業に興味を持つようになった。そのため将来は、離島で過疎が進んでいる地域を、水産業や海の魅力を発信していくことで復活することのできるような職業に就きたいと思っている。

両親の仕事の関係で、私は三才の頃、神奈川県から徳島県に引っ越した。釣りを始めたのはその頃からである。徳島県鳴門市で初めて釣りをし、初めて自分で魚を釣った感触は今でも鮮明に覚えている。そして、徳島県で三年ほど過ごして、小学校に入学する少し前にまた神奈川県に戻ることになった。引っ越してからも東扇島西公園や多摩川下流部、三浦半島、静岡県などで時間がある週末は釣りをして過ごし、釣りや海の魅力に惹かれるようになっていた。

そして、春休みやゴールデンウィーク、夏休み、冬休みなどの普段より長い休みには離島や遠い地域に行って釣りをした。その中で最も記憶に残っているのが、四年生の夏休みに行った東京都の八丈島と、五年生のゴールデンウィークに行った長崎県五島列島の福江島である。八丈島では、八丈ブルーと呼ばれる透き通った深みのある青い海に潜ってアオウミガメやムロアジの群れを見て、海の美しさを改めて知ることができた。福江島では、コバルトブルーの美しい海でマアジやキジハタなど様々な種類の魚を釣った。この二つの離島で共通している部分がある。それは、人が少なく荒れ地や空き地などがとても多いということである。そこで、豊かな海があるのだから水産業を今よりもっと活発化させて、その地域を盛り上げることができるのではないかと思った。

また、水産業を行う上で忘れてはいけないのが、海という存在や海の中の生態系だと思う。水産業はただ魚をたくさん獲ればよいのではない。海の恵みに感謝し、海の中の生態系などにも考慮して行うべきだ。そこで、考えたのがその離島の海の魅力を観光客などに発信していくということだ。そうすれば、観光客数も増えてその離島がもっと活性化していくことにつながると思う。例えば、八丈島にはユウゼンというチョウチョウウオの仲間の固有種が生息している。こうした生き物の存在や魅力を発信していくことで、興味を持った人々が離島へ来てくれるのではないかということだ。

このように、小さい頃から釣りに慣れ親しみ、生き物がたくさん生息する豊かで壮麗な海が大好きなことや数々の離島に行った経験を活かして、私は将来、離島で過疎が進んでいる地域を水産業や海の魅力を発信していくことで復活させることができるような職業に就き、社会に貢献できればよいと考えている。